

## 1. はじめに

私は現在、本校の情報工学科専門教育、プログラミング実習に対して、過去 5 年間の在学中の経験から基礎をならうプログラミング実習に問題があるのではという仮説を立てた。

本稿ではこの仮説を検証すると同時に、さまざまな視点から本校の情報教育を見直すことを目的とした研究である。

## 2. 研究方法

本校本学科の各学年の生徒数人に対して、プログラミングの基礎を習う低学年の専門授業に対してのインタビューを行なった。その結果から得られた情報を元にアンケートを作成し、各学年に配布。そのアンケートを元に研究を進めていく。

## 3. アンケート概要

対象者: サレジオ高専生 1CS~5CS

アンケート配布数: 205 部

有効回答数: 195 部

## 4. 研究結果

まずは本校本学科の専門教育、プログラミング実習に対してどのような問題があるのかを探った。そのために以下の質問をした。

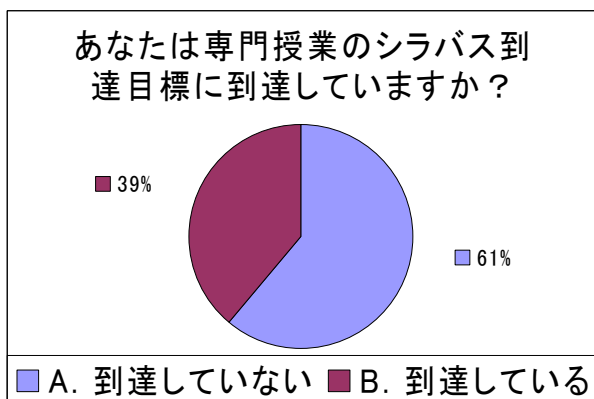


図 1. シラバスの授業目標到達度

この結果より、シラバスに到達していない生徒が多いことが判明。

次に、この原因を探った。到達している学生、していない学生の傾向を調べると次のような傾向がうかがえる。これは学生のやる気を基準に集計し、グラフにしたものである。このグラフから、シラバスの到達目標を到達している人はみな、専門の授業に対

してやる気のある学生が多いということが伺える。それとは反対に到達していない学生はやる気のない学生が多いことがわかる。

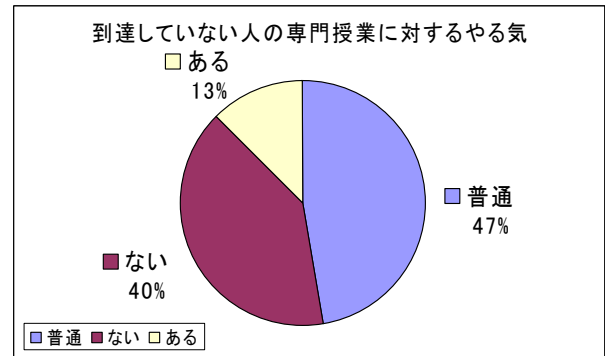


図 2. 到達していない人のやる気分布

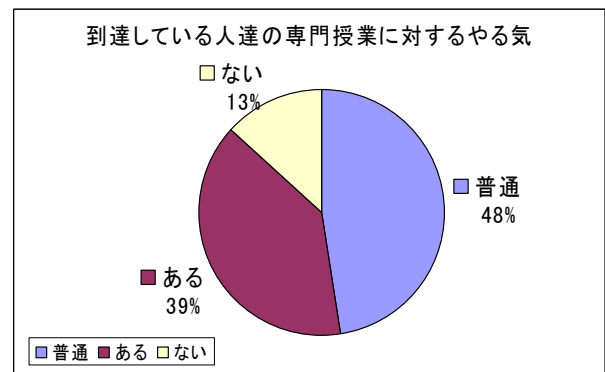


図 3. 到達している人のやる気分布

やる気がある学生の理由の多くは

○将来のビジョンが既に見えているので、ものごとを積極的にこなせる。

○専門にとっても興味があった。

やる気のない学生の理由の多くは

○先生の授業が退屈なので必然的にやる気が失せる。

○将来のビジョンが見えておらず、今やっていることも将来どのような部分で使うのか不明瞭のためやる気が出ない。

ということがわかった。この理由の詳細、さらに別の視点での結果、詳細は本論文に記載。

## 5. おわりに

この結果より、生徒の職業観を育てるキャリア教育の充実が求められる。

## 文 献

- [1] 照屋華子著, “ロジカル・シンキング,” 東洋経済新聞社, 2005年05月